

文学と自己救済と

——書評・清水文雄著「王朝女流文学史」——

位 藤 邦 生

清水文雄先生の御近著「王朝女流文学史」は、小冊ながらきわめてオーソドックスな体系のもとに記述されていて、所期せられたその体系は、序説で次のように明らかにされている。

五人の女流作家、すなわち小野小町・右大将道綱母・和泉式部・菅原孝標女および式子内親王をもって、それぞれ王朝文学の始動期・上昇期・完成期・傾斜期および崩壊期を代表せしめ、この五人をいづれも「衣通姫の流」(「古今和歌集」仮名序)を汲む者として、それぞれの時期に位置せしめることによつて、王朝女流文学史を講述しようとするのであるが、同時にこの五人が、それぞれの生きた時代において、もろもろの矛盾をはらむ社会的、歴史的條件を克服しつつたどつた運命を跡づけることにもなるであらう。

本書における先生の意図は、右の文章によつて過不足なくあらわされており、特に付け加えることはない。「心の美しさがおのずから外に匂い出るような」衣通姫の系譜に、作家としての以上の五人を据え、社会的・歴史的な條件を照射しながら彼女らの文学を考察したのが、本書であるといえよう。「あとがき」によると「本書のもとになったものは、これまで諸誌に発表した文章や、教室での講義のノートの類であ」つて、「女子大生を、おもなる読者として予想している」よしであり、なるほど啓蒙的な姿勢もある程度窺える

が、個々の作品への研究者としての取組の真摯なることは、このことによつて些かも失われてはいない。

以下大体本書の記述順序に従つて内容の紹介といささかの感想を述べていくが、私自身の関心のありようによつて各章ごと必ずしも公平な叙述になっておらぬことを、あらかじめ断つておく。

序説の一は「断絶と架橋」と名づけられている。ここでは、自分の閉ざされた運命に「断絶の谷間を意識した」王朝の女性たちの、その谷間を越える架橋としての「文学」とのめぐりあいが重視され、このいわば「夢の浮橋」が「彼女たちにとって自己救済の道となつた」ことが説かれていっている。「その虹のような虚構の懸橋を永遠に光彩あるものとさせる真実の人生があつた」との指摘は、ロマンチズムに基く文学観と見ておいてよからうが、この基本的な態度が本書の全体を支配している。

ついで序説の二は「「もののおはれ」を「しる」のタイトルがつけられている」とおり、王朝文学の根本理念としての「もののおはれ」およびそれを「しる」ことが、「文学」と係わっているその係わりようが考察されている。見解は穩当で特に新しい見方はないが、精神作用としての「しる」をすでに「共感」を含むものとしてとらえ、王朝文学の場で検証しようとの試みはたしかに興味深く、それが以後の各章で果たされているといえよう。つまり「もののおはれを生

み出した精神が、そのまま王朝女流文学を生み出した精神でもあった」と結論されるその過程を、我々は本書全体から逆に辿りうるのである。

先生は序説三「女流作家の誕生」の条で、王朝女流作家誕生の基礎となった条件として次の五項をあげていられる。すなわち(1)家系と家庭教育 (2)文学サロンとしての後宮 (3)平仮名の自由駆使 (4)自己救済としての文学の発見 (5)批評精神の体得である。つづいてこれらの条件についての明解な説明がなされているのであるが、(1)(2)(3)については、女流文学誕生のバックグラウンドとなった特殊条件としてすぐにも領かれるところであり、ここで改めて述べる必要はあるまい。私にとって一入の興味を誘われたのは、実は(4)(5)の条件であった。で、当然、多少の構えをもって読み進んだわけであったが、先生の(4)(5)の条件への言及は、うまく言えないが、まことにあつさりとしていて、これは一つの驚きであった。(5)に関しては、「王朝女性の不安定な日常生活の苦惱の中から」やがて「彼女たちの内部に、明哲な批評精神と鋭敏な人間観察の眼が養われていった」ことを、「枕草子」の例をひきながら述べていられ、これはこれで問題ないと思う。が、第四の条件について、彼女らが「現実生活の苦悩を克服する道として文学的表現を選びとつた」ことがすでに「必至の道」として了解されている点に關しては、正直にいつて私は多少物足りない思いをもった。そして、私がここに感じた物足りなさは、本書全体の感想としてあとに尾をひくことにもなるので、のちに立ちいつて述べてみたい。

第一章「小野小町」は、「小町の創造した芸術の秘密」を彼女の「夢の歌の表象を吟味することによって」探り出そうとされたもの

である。「待つ恋」の歌人小町が、すなわち「衣通姫の流」であったことが、短章ながら鮮やかに呈示されている。

第二章「右大将道綱母」では、彼女が自らの体験を「日記」として記録することによって「自己の生を持續の相においてとらえ直す」ことができた点が重視され、「物はかなさの深淵を越える道として選ばれた『日記』の意味が問われている。ここでも『蜻蛉日記』が『自己救済のよすがとなった』所以が述べられているが、私には『文学における自己救済のありかた』或いは『自己救済における文学のありかた』が、少しく単純化されすぎているような気がしてならない。自己救済を求めてのいわば血みどろの四苦八苦は、文学においても少し多様な相をもっているのではあるまいか。文学^{イコール}自己救済の構図は、究極的にはそれはそうであるにせよ、それぞれの作家のそれへの迫り方は、精神のあがきの顕現とでもいおうか、ときによってはかなりなまぐさいものであり、それ故に各々個性的で、文学の面白さはそのなまぐささの過程にも求められてよからう。本書で「紫式部日記」がとりあげられていないことも、この点と関連して私には興味深く思われ、先生がもし「紫式部日記」を扱われたとするなら、どのような接近をなされたであろうかと考えてみたいのである。

本書全体の印象としても、文学と自己救済との関係があまりに明解に割り切られすぎているような気がする。が、恐らくこれは先生のロマンチストとしての一面が、年月とともに次第に明確になってきたことにも起因しているのであって、文学作品への接近方法を異にする立場からいちがいに非とするには勿論あたらない。また、昭和十五年に出された名著「女流日記」を読めば、私が今回不満とした点

への追求がそこではかなり執拗に行なわれているのが知られ、先生の御関心のおのずからな推移がおよそ三十年の従庭と思ひ合わされてそれも私には感喟深い。

かつて桐辰雄が兼家を「愛せられることは出来ても、自ら愛することを知らない男」としてとらえたのに共感され、そういう男の愛を一途に求めた道綱母の哀切な詩えに自ら沈潜して耳をすましていられる先生には、一つの立場をふまえた確かさが感じとれる。が、同時に、(例えば室生犀星のように)兼家・道綱母の人物像についての別の見方も当然あってみれば、私は、彼女が文学を自己救済と悟った次元に自らをおいて「詩論日記」全体を眺め渡された先生の方法を、一方では多少飽き足りなく思ったのであった。

第三章は「和泉式部」である。ここでは式部のいくつかの歌をおして彼女の和歌の特質が見事にとらえられており、これは和泉式部研究一筋にうち込んでこられた先生の独擅場ともいえるのである。先生は「哀愁に彩られた華艶」が式部の文学の色調であったとされ、主として恋愛歌人としての角度から彼女に照明をあてられた。そして「恐ろしいばかりの孤独の深淵」に立ちつつ「自分で自分の心の姿を見て歌ったような」彼女の歌の特質が鋭い切り口で我々に呈示される。また、このようにして歌われた式部の愛が「情念としての純粹度のきわめて高いものであったこと」が、逆に、ときに難解にもなるその表現とのつびきならぬ関係で結ばれていたことに改めて注意が喚起されているのも、従うべき意見であろう。「和泉式部日記」についてはごく簡単にしか触れられていないが、以上の記述から、彼女の愛の記念碑としてのこの日記の特色もすでに明らかにならされていると見られよう。

第四章は、菅原孝標女の生涯を「更級日記」の表象をたよりとし「彼女の見た夢を主たる手がかりとして」跡づけられたものである。彼女が書きとめた前後十一回の夢を丹念に吟味しつつ彼女の生涯を述べていかれる手際は、「更級日記」そのものの味わいと同様に、真直ぐな、いささかのでらゝないものであり、孝標女の夢(これをあこがれといってもよく、彼女にあってはむしろ思想と呼んでもよからう)の年ととも微妙な変化がげざやかに把握されている。ただ、私が前に道綱母の条に触れてもらした不満は実はここにも底流しているのであって、彼女の最後の夢のあなたへ一直線につながる糸としての文学が、そのひといるの糸のままに彼女の生の中半から手繰られるまっとうさを多少疑問に思ったのも事実であった。

第五章「式子内親王」は、その前半を主として彼女の伝記的事実の叙述に、後半を彼女の歌の特色の考察にあてられたものである。内親王の歌については近年馬場あき子氏のまとまった論考があり、本書のあとにも竹西寛子氏の本が現れて、それぞれ特徴をもった態度で内親王の歌への接近を示しているが、清水先生の態度のそれらとの一つの違いは、文学史家としての目を随所に間配っていられる点にある。それは彼女の歌に見られる「艶」を王朝的な「あはれ」の最後の燃焼の姿として見られる所にも、また、内親王の「齋院」が中世の隠者の「草庵」に類似した性格を持っている点に注目される所にも、明瞭にうかがわれるのである。

内容について詳しく論評するには紙幅の余裕をすでにまったく失った。内親王の時代を経て「文学史のバトン」が、女房の手から隠者

の手へ渡された」本質を洞察され、しかも隠者が「女房文学の「あはれ」の伝統を身をもって伝えひらく美の使徒となった」ことを指摘された「結語」に至るまで、一貫して非常に緊密な構成をもった「王朝女流文学史」の紹介も批評も、一向意に満たぬままで、これで筆をとめねばならない。

深く掘り進んだ井戸ほど、清い水を得られるように、王朝女流文学の真実を長年にわたって求めつづけられた、清水文雄先生をまっ

て、この清冽な水が掬され齎された。なによりも若い人に勧めたい書である。苦渋のあとを少しもとどめず、一見手もなくなされたと見える文章の、一行一行に、心の美しさ詩の美しさが露のようにきらめき落ちるのを、我々はここに見るであろう。

先生の御健康を祈る。

(昭和四十七年五月十日発行、古川書房刊)

——広島大学助手——